

## タンザニアの農業機械化

我が国が  
稲作支援

JICA（独立行政法人国際協力機構）が推進するAFICAT（アフリカット）では、アフリカの農業機械化を振興している。今回、タンザニアの機械化の現状を視察した。

◇ アフリカは暑い国である。暑くて、野生動物たちの害害といったイメーシはあるが、稲作が盛んなどとは誰もが思っていないだろう。実は、タンザニアは我が国が長期にわたり稲作振興を支援したこともあり、想像以上の稲作国となっている。

我が国は1970年代から支援を開始し、現場レベルでは稲作栽培技術と灌漑開発を「コメ生産能力強化プログラム」として実施し、技術普及を図ってきている。

JICAが作成した「JICAアフリカ稲作技術マニユアル」CARD10年の実践」（2021年4月刊）では、背

JICAは「アフリカ緑の革命のための同盟（AGRA）」と共同で、2008年5月、横浜で開催されたTICADV（第4回アフリカ開発会議）の場において「アフリカ稲作振興のための共同体（CARD）」を発表し、CARDのもと、JICAは稲作振興に関連する様々な技術協力を

実施。それら技術協力がCARDの目標である10年間で米生産量増（2018年までの10年間で2007年の年間生産量1400万トンを2800万トんに増加）の達成に大きく貢献したことを述べ、現在、2019年から2030年までの12年間で更なる米生産量増（2800万トから5600万トへ増加）を目指すCARDフェーズ2が開始され、JICAは引き続き技術協力を実施していくとしている。

CARDフェーズでは、何をしてきたかという①パリエューション②栽培環境別アフローチ③人材育成アフローチ④南南協力アフローチで、このうちの②では、灌漑水田①既存灌漑施設のリハビリ・水利組合の強化、天水低湿地②稲作開発モデルの確立と普及、天水畑作③ネリカの普及拡大④をあげ、それぞれの栽培環境に応じた適正品種の選定、栽培技術の改善及び必要な投入（水、肥料等）を行った。この間、農業機械も導入が図られた。

そして今、進められているフェーズ2では、米ビジネスの促進支援や、農業機械化促進、収穫後処理技術の向上、農家の生計向上・生活向上（RICEAFROUCH）を行う、目標達成を目指すとしている。

こうした支援の効果により、タンザニアにおける米生産は2009年に89万トだったものが、2018年には228万ト（白米換算）に急増した。我が国の技術協力で稲は手植えながら真っ直ぐに、規則正しく植ええられるようになり、収穫向上にも貢献した。生産量が増えたのは、農家が米が売れることを知り、灌漑地の前や先に水田を切り拓くなどして面積を増やしたからである。同時に、耕うんや収穫、精米で機械化が進み、生産性向上が図られたからでもある。

タンザニアに広がる水田⑤。手植えだが、日本の指導で整然と植えられている⑥。

## 農経しんぱう 2022年8月22日号

写真提供：JICA/アフリカ開発会議（AGRA）

